

《書 評》

Vidos, B. E.: *Manuale di Linguistica Romanza*, Firenze, 1959

占 浦 敏 生

abbreviation

cat.	カタロニア語	prov.	プロバンス語
dalm.	ダルマチア語	ret.	レトロマン語
fr.	フランス語	rom.	ロマンス語
ital.	イタリア語	rum.	ルーマニア語
lat.	ラテン語	sard.	サルジニア語
port.	ポルトガル語	sp.	スペイン語

§ 1 はじめに

「ロマンス言語学の手引」は、Nimega 大学のロマンス言語学の教授 Vidos, B. E. の手による 400 頁余の書物である。表題からわかるように、99% まで ital. で書かれているが時々、ドイツ語や fr. の引用文にも出会う。内容は 1 部 2 部に分けられ、1 部では方法論や 20 世紀における rom. 言語学の動向（ソシュールの共時通時論はもちろん、構造言語学にも言及している）etc. 一般論が述べられていて、2 部では rom. の起源や方言の分布 etc. 具体論が述べられている。また、この書物では、rom. のみならず、他の印欧語（eg. アルメニア語、ギリシア語、etc.）やセム語、さらに、バスク語に至るまで幅広く取扱っている。巻頭の参考文献も、単行本、雑誌を合せて、約 200 種を数えるほどである。そして、この書物の一番良い点は、各章の終りにその章に関する参考文献の指示が出ていることである。ここではこの書物のすべてを読み、その内容をくわしく御紹介することはできないので、面白そうな章を 1 つだけ選んでその内容をまとめ、私なりの批評を加えたいと思う。

以下、第 2 部 5 章 *Caratteristiche delle lingue romanze* [rom の章

表]を取あげてみよう。

§ 2 rom. の特徴を決める方法は何か？

ある言語の特徴を決めるのは容易なことではない。一般に、言語の特徴を端的に表すとされる intonation の差を使う方法が考えられるが、これは、まだ、実用の段階に達していないし、音の使用頻度の差を使う方法もあるが、まだ、信頼できる研究 (parole に基づく広い範囲の材料に統計的な方法を応用する研究) は為されていない。

そこで、結局、ある rom. の特徴を決めるには、その言語と他の rom. との関係、ならびにその言語と lat. との関係、の2つを調べて、その言語 (あるいは少数の rom.) にだけ存在する現象をとりあげ、lat. からみて保守的な現象か改新的な現象かを見きわめるのがよからう。この方法によって見出された結果の総合が、その言語の特徴と云えるのではあるまいか？

以下、節を改めて、個々の rom. の特徴を列記しよう。なお、~~保~~は保守的特徴、~~改~~は改新的特徴を示す。

§ 3 rom. の特徴

(1) cat. (スペインのカタロニア地方の言語) の特徴

①~~保~~……lat. ~~lt~~-~~l~~-~~l~~ を velar で保存。eg. lat. alteru(m) 「ほかの」 > cat. altre. (この ~~l~~ は、fr. port. prov. sp. では母音化している)。

②~~改~~……lat. のアクセントのない母音の消失 (但し、語末の -a は除く)。eg. lat. septo(m) 「7」 > cat. set (この現象は、fr. prov. と共通)。

(2) dalm. (アドリア海東岸地方の言語) の特徴

①~~保~~……lat. の母音間無声閉鎖音 (p, t, k) の保存。eg. lat. ripa 「岸」 > dalm. raipa. (この現象は、南 ital. 方言, rum. sard. etc. と共通)。

②~~保~~……(8)の②と共通。

(3) fr. の特徴

fr. に関しては、他の rom. と紙面を区別して特徴が示されている。今回は時間的な余裕がなかったので、このことについては別の機会に述べたいが、要するに、fr. は、rom. の中で最も改新的な言語であって、ここで列記している保守的特徴は全然示していない。このことが即ち、fr. の特徴になっている。

(4) ital. の特徴

①(保)……lat. と全く同じ語が多い。eg. amare「愛する」, terra「土地」, etc.
etc.

②(保)……lat. とほぼ同じ語も多い。eg. lat. aqua「水」 > ital. acqua, etc.
etc.

③(改)……俗 lat. の改新形 (com) — imitiare, manducare の継続。即ち,
ital. cominciare「始める」, mangiare「食べる」(これに対して,
port. sp. は古典期の lat. を継続)。

④(改)……俗 lat. の改新形 exvigilare の継続。即ち, ital. svegliare「目ざ
める」。

(5) port. の特徴

①(保)……lat. comedo「食べる」の保存。即ち, prot. comer. (この現象は, sp.
と共通 cf. (4)の③)。

②(保)……すべての lat. の母音を変えずに保存。eg. lat. faba「豆」 port. fava,
etc. etc.

③(保)……動詞をくりかえす肯定表現の保存。eg. port. Vem comigo?「汝は私と一緒に
来るか?」という問に対して, (Sim. 「はい」の代りに) Venho.「私は来ま
す」を用いてもよい。

④(保)……lat. の完了形 (ital. で言えば遠過去に相当) の日常使用。

⑤(改)……lat. の母音間子音 -l- と -n- の脱落。eg. lat. caelu(m)「空」 > po -
-rt. ceu; lat. bona「良い」 > port. boa, etc, etc.

⑥(改)……人称語尾を持つ不定法の発生。eg. Tempo ã de partir.「私が出発する
のは今である」は1人称単数であるが, 2人称単数にすると, Tempo ã de
partires「汝が出発するのは今である」となる。(この現象は, sard. と共
通)。

(6) ret. (スイスの一部と北イタリアの山中の言語) の特徴

(保)……lat. codex「本」の保存。即ち, kudes.

(7) rum. の特徴

①(保)……lat. u, o, 母音間閉鎖音, 母音間の r と s の保存。eg. lat. cruce(m)「十字
架」 > rum. cruce, etc. etc.

②(得)……lat. の格変化の保存。eg. lat. capra(四)「山羊を」, caprae「山羊に」
> rum. capra「山羊を」(又は「山羊は」), capre「山羊に」(又は「山羊の」)。

③(得)……rum. にだけ保存されている lat. の語彙が約 120 種存在。eg. lat. adiutorium > rum. ajutor「援助」。etc. etc.

④(改)……lat. lucrō「もうける」が, rum. では「働らく」の意味に変化。

⑤(改)……スラブ語の影響が大きい。

(イ)スラブ語に由来する接辞の存在。eg. ne-, (否定を示す), etc. etc.

(ロ)語頭の e- が [je] と発音される。

(ハ)呼格(但し女性の固有名詞に限る)が -o に終る。eg. Maria の呼格は Mario.

(ニ)lat. timeo「恐れる」が再帰形になっている。即ち, rum. a se teme.

(ホ)lat. lumen「光」が rum. では「光」又は「世界」の意味に拡大。これは、古代教会スラブ語 svetu の影響。

(8) sard. の特徴。

①(得)……lat. e. u. o の保存。eg. lat. nive「雪」> sard. nie ; etc. etc.

②(得)……lat. e, i の前の k, g. を velar のまゝで保存。eg. lat. cera(四)> sard. kera「ろう」; etc, etc. (この現象は, dalm. と共通)。

③(得)……sard. 中部方言で lat. j の保存。eg. lat. jam「すでに」> sard. ya.

④(得)……2)の①と共通。

⑤(得)……lat. 接続法 imperfect の保存。eg. lat. plueret (pluo「雨が降る」の接続法 imp.) > sard. proereti.

⑥(得)……直接話法が ca (< lat. quia) によって導入される。(これは、15 世紀の lat. 訳聖書 Vulgata に例が見られる)。

⑦(得)……sard. だけが保存している lat. 語彙の存在。

(9) sp. の特徴

①(得)……(5)の①と共通。

②(改)……生物の目的語に a を付ける現象を疑人法にまで拡大。eg. sp. temer a l'agua「水を恐れる」(水が疑人化されている)。

§ 4 どの rom. が最も保守的か?

さて、著者は、上述の特徴の中のどこにポイントを置いたのかわからないが、次のような判断を下している。

「rom.の中で最も保守的な言語は sard. である。これは、島であるので、自然環境が孤立しているからであろう。その次に位するのは ital. である。その次がイベリア半島の言語で、その保守性の順序は、port. , sp. , cat. の順である。そして、前にも述べたように、rom.の中で最も改新的な言語が fr. である。図示すれば、

sard. → ital. → port. → sp. → cat. → fr.

rum. については、著者は、どこに位するのかを明示していない。即ち、「rum. は、rom.の中で最も特殊な改新を行ったけれども、非常に注目すべき保守の特徴を持っている」としている。さらに、dalm. , prov. , ret. については、全く位置付けが為されていない。

§ 5 おわりに

最後に、筆者の批評 (§ 1. § 4 にも一部存在) を加えておきたい。

まず、この書物の文体であるが、rom. の特徴が思いつゝまゝにダラダラと並べてあるので筆者は、それをまとめるのに苦労した。もう少し順序正しく (筆者の文章でもまだ不十分であるが、せめてこれ位に) 節を区切って書いて欲しかった。

次に、根本的な問題であるが、はたして rom. の特徴はこれだけであろうか? (著者もこれだけとは云っていないが)。音、形態、syntax に関しては割合くわしく述べてあるが、意味に関してはわずか 2 例して挙げられていない。また rum. については、スラブ語の superstratum がくわしく述べられているのに、port. におけるアラビア語の、さらに、南 ital. 方言におけるギリシア語の substratum は、ほとんど述べられていない。

なお、上述の rom. の特徴は、rom. を話す人々にとっての特徴であって、rom. 以外の言語を話す人々によれば、また別の rom. の特徴が指摘されるであろう。つまり、上述の方法は rom. を内側からながめたものである。しかし、内側からと同時に、外側 (rom. 以外) からもうながめ、rom. だけに存在する現象を引出してこそ、本当の (厳密を意味での) rom. の特徴と云えるのではあるまいか? (§ 1 で述べたように、著者は幅広く追求しているようではある)。

とにかく、この書物では、以上のような問題点を含んではいるものの、§ 1 で述べた長所の他に、豊富な具体例と良心的な説明を加えており、rom. 研究者にとって貴重なものと云えよう。